

国語科

「国語科において育成を目指す資質・能力」を育む授業開発

—第1学年「はじめは『や!』」の実践を通して—

瀧山真悟

Developing Classes to Cultivate “the Qualities and Capabilities of Aiming at the Fostering of Abilities in Japanese”

—Through the Practice of “*Ya!* is the Beginning” in the First Year—

Shingo Fuchiyama

The purpose of this study was to develop classes that cultivate the qualities and abilities effectively by setting the goal “aim at fostering the qualities and abilities in Japanese” with keeping in step with the reality of students. The material of this study is a unit “*Ya!* is the beginning”-in first grade of elementary school. The qualities and abilities in Japanese language education to be developed are the ability to think in investigating a subject with a multidimensional perspective by language, and the attitude toward enriching our lives through setting our mind on upgrading the language ability. In this research, students were asked to exchange question and answers through a notebook, and read aloud the material to pre-schoolers. The results suggest that exchanging questions and answers through a notebook independently helped students to bring out their independent thinking and then bring a variety of thinking together with effect in class; therefore, students effectively understood the material from various angles. In addition, the results also revealed that the attempt to enrich language activity managed to bring out students-centered learning, and greatly influenced on the fostering qualities and abilities. (p.47-52)

1 問題の所在と研究の目的

私たちは、キャシー・デビッドソンの「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」¹⁾という予測を皆が1度は耳にし、AIやロボットとは異なる土俵で勝負しなければならない時代を生きていく子どもへの教育について、真剣に考えていかなければならなくなってきた。

日本では、学力の「ゆとり」か「詰め込み」という二者択一的な捉えに終止符をうち、学校教育法第30条第2項において、学力の三要素が示された。そして2015年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部において「論点整理」が取りまとめられ、国語科においても国語ワーキンググループが設置・開催された。資質・能力という言葉をよく聞くようになり、国語科において育成を目指す資

質・能力がおぼろげながら見えてきたのである。

そこで、国が示す大きな流れを捉え、子どもたちとつくりあげる授業にいち早くそれらを反映していく必要がある。

本研究は、国語科において育成を目指す資質・能力を設定し、それらを効果的に育む授業の開発を行うことを目的とする。

2 国語科において育成を目指す資質・能力

(1) 文部科学省が示す国語科において育成を目指す資質・能力

文部科学省は「事物、経験、思い、考え等を言葉で理解したり表現したりする際には、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、創造的・論理的思考、感性・情緒、他者とのコミュニケーションの側面から、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉

え、その関係性を問い直して意味付けるといったことが行われており、そのことを通して、自分の思いや考えを形成し深めることが、国語科における重要な学びである²⁾と示した。そして「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることが、『言葉による見方・考え方』である³⁾と整理した。また学校段階ごとに育成する資質・能力についても整理しており、以下に示すものは小学校段階におけるものである⁴⁾。

◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- ①日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合うよさを味わうとともに、言葉の大切さを自覚し、言語感覚を養い、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(2) 本校国語部会が設定した国語科の本質に根ざした資質・能力

本校では子どもたちに育む資質・能力を「課題対応能力」「人間関係形成・社会形成能力」「キャリアプランニング能力」の3つに絞り、国語科の本質に根ざした資質・能力を設定した。

表1 本校で設定した国語科の本質に根ざした資質・能力

	国語科の本質に根ざした資質・能力
課題対応能力	日常・社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができる。創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養うとともに、新たな考えを創造する力を高めるようにする。将来に希望をもつために言葉で課題を多角的に精査したり、構造化したりするための思考力を身に付け、適切に表現することができる。(論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力)

人間関係形成・社会形成能力	日常・社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができる。人との関わりの中で、国語で正確に理解したり適切に表現したりする。言葉や文字によって、考えを形にしたり深化したりするために、意志や感情などを伝え合い、コミュニケーションを成立させることができる。(コミュニケーション能力の基盤を成す国語の運用能力)
キャリアプランニング能力	言葉を通じて伝え合う価値を認識するとともに、言語文化に関わり、国語を尊重しようとする。言葉を生活の中で使いこなし、言語生活の向上を志すことで、自分の人生を豊かにしようとする。(国語を尊重し、言語生活の向上を志す態度)

本研究では、本校の子どもたちの実態に合わせて設定した以上の3つの資質・能力の育成に向けた授業のあり方について考察する。

3 研究の方法

(1) 対象児

広島県内の小学校1年生1クラスの子ども32名を対象に調査を行った。

(2) 調査時期

平成28年10月から12月の間で実施した。

(3) 授業単元と構成

調査対象とした単元は「はじめは『や!』」(学校図書1年上)であった。

第1次 お話の大体を捉えよう(2時間)

第2次 くまさんはどんな気持ち(8時間)

・場面の読みとり(4時間)

・読みとったことを音読につなげる(4時間)

第3次 年長児にきいてもらおう(1時間)

(4) 育成を目指す資質・能力とそのための方略・手立て

①言葉で課題を多角的に精査するための思考力 (課題対応能力)

方略：子どものノートを使って、一問一答のやりとりを行い、子どもたちの思考に沿って、他者の読みの解釈と出会わせる。

子どもたちの初発の感想を皮切りに、教師が質問事項をノートに記入し、子どもはそれに対する答えを書くというやり取りを繰り返す。

子どもたちのまちまちな理解の進度をならし、子どもたちがどんな考えをもっているかを教師が把握することで、それぞれの子どもがもつ読みの解釈をより意図的に出会わせることが可能となる。以下が、子どもたちに考えさせ、多角的にとらえさせる箇所である。

きつねさんがすわりました。
でも、まだふたりはともだちじゃないから、
「……。」
「……。」
で、すこしすまして
「や。」
「……や。」

下線部が、登場人物であるくまさんがはじめて「や。」といった場面であり、このお話の題名である「はじめは『や!』」の部分にあたる。しかし、本文には感嘆符がついていない。その理由を考えさせることで、読みの解釈は深まっていくと考える。おそらく子どもは、緊張して声が出なかったと考えるであろう。教師の解釈も同じである。ただその緊張の大きさは量りしれないくらい大きいものであったと感じさせるために、題名の「や!」と本文の「や。」を比べさせるのである。今回は、「普段はおしゃべりであるというくまさんの性格を読み取らせること」と、「自分であったらなんと声をかけるかという自分との比較」で、「や!」と「や。」の違いを生んだくまさんの緊張について捉えさせ、読みの工夫に生かすことができるようにする。

②言語生活の向上を志すことで、自分の人生を豊かにしようとする態度（キャリアプランニング能力）

方略：学習のゴールに学んだお話を年長児に読み聞かせる場を設定する。

普段から子どもたちは、隣接する幼稚園の年長

児と交流を深めている。そこでは、1年生1人に年長児1人のペアリングを行い、責任をもって年長児とかかわることができるようにしている。

今回は国語科の学習を普段の交流に活用できるようにする。

(5) 評価と事後調査の内容

授業中の発言や授業後のノート記述を、ルーブリックを用いて評価し、質問紙を用いて事後調査を行う。

表2 資質・能力の育成に向けた評価基準表

	B(概ね満足)	A(十分満足)	S(期待以上)
課題対応能力	書かれていることを正しく読みとっている。	書かれていることを根拠として考えを持ち、仲間と意見交流する中で、考えを更新している。	
キャリアプランニング力	工夫点を意識して、よりよく読もうとしている。	工夫点を意識し、相手意識をもって、よりよく読もうとしている。	満足することなく、新たな工夫点を見つけて、よりよく読もうとしている。

4 授業の概要

(1) 言葉で課題を多角的に精査するための思考力の育成に向けて

ここでは、ノートでのやりとりと言葉の課題を多角的に捉え直して読みの解釈を獲得させた第2次の7時間目の授業を中心に記述する。

①ノートでのやりとり

単元のはじめに、「はじめは『や!』」の読み聞かせを子どもたちに行い、お話の好きなところをノートに書かせた。

その後、ノートに子どもたちの感想の根拠を問う発問や、お話の大体を捉えさせるための発問を書いて、子どもたちとやり取りを続けた。頻度は、毎日1回から2回程度で、単元の学習を終えるまでに、一人平均10.2回のやり取りを行った。

そのことにより、子どもの誤った読みの解釈を修正したり、新たな気づきを引き出したりすることができ、授業の意見交流がより活発となった。

その中で、児童Aがくまさんは恥ずかしがり屋であるという記述をしており、教師が質問を繰り返した。

P：くまさんは何度もすれ違っているのに、話しかけないから、恥ずかしがり屋さんなのだと思います。

T：お話をしないから恥ずかしがり屋だと思ったの？

P：はい。

T：くまさんの話した言葉を見つけてみて。

P：「はんぶんもちましょう。」「やあやあやあ。」

T：お話の終わりの方ではたくさん話しているね。お話の初めの方はどうかな。

P：「いいお天気でいい気もち。」「きれいだねえ。」

T：A君は今日、お家を出たときに「いいお天気でいい気もち。」と言った？

P：わざわざ言いません。

T：教室に花を飾っているけど、「きれいだな。」と話しましたか。

P：きれいだと思うけど、わざわざしゃべらない。

T：A君は、お話が好きな人ですが、そのA君でも言わないようなことをくまさんは2回も言っているね。どなんくまさんだと思う？

P：本当は、ぼくよりもおしゃべりなくまさんだと思う。

以上のやり取りを事前に行うことで、授業の中でこの考えを取り扱うことができるようにした。

また、B児は、最後にくまさんときつねさんが仲良くなりあたたかいお話だから好きだと記述しており、教師が質問を繰り返した。

T：どこで仲良くなりましたか。

P：「やあやあやあ。」のところ。「いちばんのともだちになりました」と書いてあるから。

T：題名の「はじめは『や!』」の「や!」はどの部分ですか。

P：ベンチにすわって、はずかしそうに言ったと

ころです（感嘆符の有無には気付いていないが、登場人物の気持ちは捉えられている）。

T：「や。」から「やあやあやあ。」の間は、仲良しじゃない？

P：その間は、普通の友だちで、「やあやあやあ。」からが1番の友だち。親友ってこと。

T：B君はどうやって友だちを作りますか。

P：目が合ったら友だちになる。

T：目を合わせるだけ？

P：あとは「友だちになろう。」と言います。

このようなやり取りの中で、題名の「や!」が本文の「や。」の部分であることや、自分の友だちづくりの経験を引き出した。

②第2次7時間目

本時において、子どもたちは、くまさんがきつねさんに話しかけて友だちになる場面を、どのように音読するか考えながら学習を進めた。

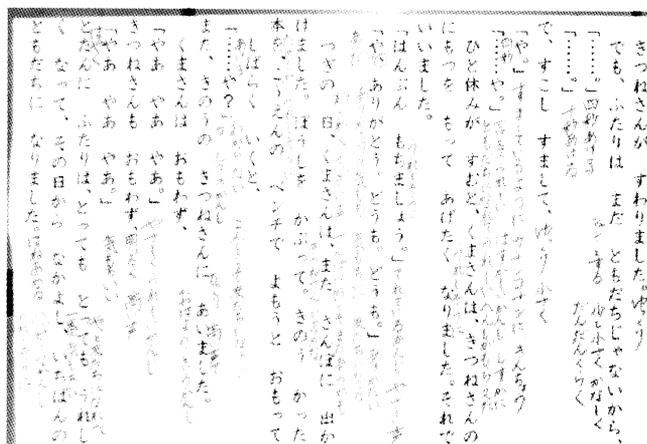


図1 授業前に子どもたちが見つけていた読みの工夫

「や。」の部分子どもたちに読ませると、感嘆符がついているのではないかと思わせるくらい大きい声で読む子どもと、緊張している登場人物の気持ちを反映させて小さい声で読む子どもがいた。「すまして」の意味は、意味を知っている子どもの説明で「かっこうをつけた感じ」であると捉えた。その後、題名にはついている感嘆符が、本文にはついていないこと、さらにこのくまさんは、おしゃべりなくまさんであることを加えて捉えることで、「や。」をどのように読むべきか考

えていった。この活動を通して、子どもたちは、「こんにちは。友だちになろう。」という言葉が緊張で「や!」となり、さらなる緊張で「や。」となったことを理解し、くまさんが大きな緊張を抱えていたことを捉えることができた。

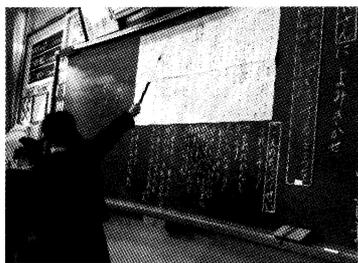


図2 授業の様子

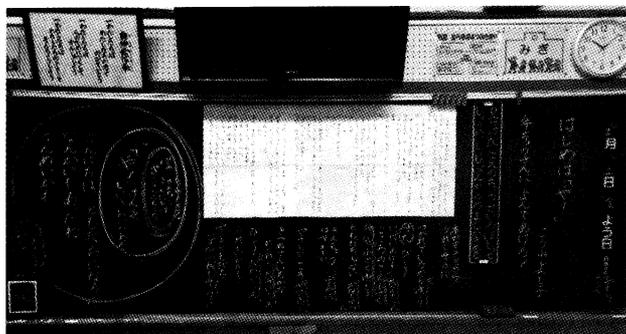


図3 授業の板書

(2) 言語生活の向上を志すことで、自分の人生を豊かにしようとする態度の育成に向けて

ここでは、第1次の導入場面と、第3次の年長児に読み聞かせを行った場面を中心に記述する。

①第1次の導入場面

単元のはじめに、子どもたちに対して年長児と交流を行うときはいつも上級生として接しているが、ドッジボールでボールを当てられたり、ものの作り方を教えてもらったりして、年長児から学ぶことがたくさんあることを話した。互いに学び合い、仲良くできていることは素晴らしいことであると話していると、子どもたちからはそれでもやっぱり上級生として、年長さんに何かしてあげたいという思いが語られた。そこで勉強のことなら、私たちが教えることができるということになり、これから学習するお話を年長児に読み聞かせてはどうかという話になった。

すぐにでもできるという子どもがいたため、音読させてみて、教師がまだまだ年長児に読み聞かせできるレベルに達していないことを伝え、どう

したら上級生として教えることができるレベルの高い読みになるかを考えさせた。以下は子どもたちが考えたものである。

- ・声の調整(大・小, 速い・遅い, 強く・優しく, 高く・低く)
- ・間(「,」 「。」)
- ・絵を見せる
- ・はっきり(しゃべっているところは,しゃべっているように)
- ・つまらず

その後、これらを意識しながら読み聞かせの練習を積み重ねた。

②第3次 年長児に読み聞かせを行う

子どもたちは、教科書をもって幼稚園に行き、年長児に「小学校に入ったらこんな勉強をするよ。」と話しながら、練習の成果を発揮して読み聞かせを行った。



図4・5 年長児に読み聞かせをする1年生

5 結果と考察

授業後、課題対応能力についてノートの記述から見とろうと考えていたが、子どもたちの記述からだけでは、見とることが難しかった。そこで学習後に質問紙を作成し、①「や。」をどう読んだかと②はじめに読んでいた読み方と変わったかについて答えさせ検討を行った。

まず1つ目の「①『や。』をどう読んだか」については、「小さく」「恥ずかしそうに」またそれに類似するキーワードを記述した子どもが24名いた。その他は、「やさしく」「笑顔で」が4名「かっこうつけて」が2名「息をすいながら」1名、無回答が1名であった。①の結果から、多くの子どもが登場人物の気持ちに寄り添い、読み

方の工夫を見出していたことが分かる。子どもたちの回答を見ていると、「恥ずかしいから小さく読もう。」「恥ずかしいから、息を吸いながら読もう。」というように、根拠が同じでも読みの工夫はいろいろであった。無回答の1名については、個別で面談し、読みの工夫について話したことで、自分なりの読みの工夫を見つけることができた。

2つ目の「②はじめに読んでいた読み方と変わったか。」については100%の子どもが肯定的回答をした。「や。」という短い言葉にこだわって学習を進めたことで、子どもの読みの工夫も促されたようである。

以上の結果から、言葉で課題を多角的に精査するための思考力を育成するという目的は達することができたと考える。

次に、キャリアプランニング能力については、質問紙調査を事前・事後で行った。「国語の学習は大切だと思うか。」という質問に4件法（あてはまる、どちらかというかとあてはまる、どちらかというかとあてはまらない、あてはまらない）で回答させた。事前調査では2名が否定的な回答をしていたが、事後調査では32名全員が肯定的な回答をした。自分たちの学習が、年長児の笑顔を生み出し、学習する意義を感じる事ができたようである。学習後の日記には、この学習のことに触れ、「今度は、足し算や引き算を幼稚園に教えにいきたい。」と書いている子どももいた。これは言語生活の向上を志すことで、自分の人生を豊かにしようとしている姿だと考える。

6 結論と今後の課題

ノートで子どもとやり取りを密に行うことは、子どもたちの多くの考えを効果的に出会わせ、言葉で課題を多角的に捉えさせる授業を構成する上で、欠かすことのできない手立てであることが分かった。子どもたちの実態把握はもちろんのこと、限られた授業時間の中で、考えの深まりを生むことができる。これまでの実践では、新しい読みの解釈と子どもたちを出会わせるには、ある程度レ

ベルの高い学習内容が求められるため、教師主導の授業展開となり、教師と子どもとの間に溝ができてしまっていた。ある程度レベルの高い学習を子どもたちに求めるのであれば、子どもたち全員を同じスタートラインに立たせて、授業を進めていく必要があり、それはノートでの個別のやりとりがあつてこそ達せられる。課題としては、このノートでのやりとりを単純化してより運用しやすくしていくことである。

また本時を通して、言語活動を充実させ、子どもに目的意識を持たせて学習に取り組ませることが、主体的な学習を生み出すことができると改めて分かった。しかし、言語活動が目的化してしまい、教師や子どもの負担が増えることには常に留意する必要がある。身近にある学習の必要感を上手く拾い上げたり、教科間の壁を低くして他教科と横断的に学習を進めたりする必要がある。

<注および引用文献>

- 1) 2011年8月ニューヨークタイムズ紙のインタビューにおいて
- 2) 文部科学省教育課程部会「国語科ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」、文部科学省HP(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/sonota/1377097.htm), 2016.
- 3) 前掲書 2)
- 4) 前掲書 2)